

27．猿のはじまり（イゴロッタ）

昔々、ベンゲットの地、カパンガン山脈の近くに、素朴な農夫と妻がいました。狭い農地で、一日中働いていました。この農夫と妻には、カーグという名の幼い息子がいました。彼はほとんどの時間、米の黄金の穂を、太陽の下で乾かし、空腹な鶏を稲から追っ払うことで、両親の手伝いに使っていました。

毎日、カーグの父は、農地で熱心に働き、米と野菜を植え、その間に、母は牧場ですべての動物を世話していました。家族の食事を調理するために、野菜を取り入れたりすることと平行して。カーグの両親は、太陽が出てから、沈むまで、熱心に働き、一人息子のためには、ほとんど時間を割きませんでした。しかし、それはカーグを愛していなかった、ということではありません。

ある日、カーグの母は、家畜の番や家族の夕食のために、野菜を集めたりした後、家に帰ってきました。彼女はカーグに特別な贈り物を持ってきました。さとうきびの棒です。カーグは、母のプレゼントを手にして、とても幸せでした。「お母さん、僕のために、さとうきびの皮をむいてちょうだい。」しかし、母は夕食のために野菜の用意に忙しかったのです。「ごめんなさい、カーグ。でも今、私はとても忙しいの。あなたのために、お父さんにさとうきびをむいてもらうように、頼みなさい。」

そこでカーグは、さとうきびを持って、父の所へ行きました。父は家の外の木の台に座っていました。「お父さん。」カーグは言いました。「お母さんが、僕にさとうきびの棒をくれたんだ。僕に、その皮をむいてくれる？」しかし、父は農地の仕事で一日疲れ、息子に言いました。「私がどれくらい疲れているか、わかっているのか。お母さんがさとうきびをくれたんだ。だから、お母さんがお前にむくべきだ。」

カーグは母の所へ戻り、もう一度、さとうきびをむくように頼みました。しかし、彼女は、まだ食事の用意で忙しかったのです。「お前は愚か者フィリピンの神話と伝説 27．猿のはじまり

だよ。私の手がふさがっているのが見えないのか。お父さんにさとうきびの皮をむいてもらうように言っただろう。もう私の邪魔をしないでくれ。」

失望したカーグは、台の父の所へまた行って、また、さとうきびの皮をむくように、頼みました。このたびは、父は怒りました。「私は疲れている、と言っただろう。」と、息子に向かって叫びました。「出て行って、私をひとりにしてくれ。」

悲しいカーグは、父を残して家の中へ入って行きました。彼は、両親が彼のことを愛してないと思って、心をかき乱されました。「もし、僕のお母さんとお父さんが、僕を愛してないなら、」彼は独り言を言って、「家から出て、ひとりで生きていくんだ。」

怒ったカーグは、さとうきびをズボンのうしろにつめて、家を出る準備をしました。ところが彼がさとうきびの棒をズボンに突っ込むやいなや、びっくりするようなことが起きました。さとうきびの棒は、すぐにねじれた尻尾になり、毛で覆われました。毛はカーグの体全体を覆いはじめ、彼の腕、足、そして顔まで、そして彼の耳は、普通の大きさの二倍になりました。

カーグは家から走って、台の上で驚く父を飛び越えて行きました。父は、自分の息子に起こったことを見て、びっくりしました。そして、妻を呼び、妻は彼と家を飛び出しました。

カーグは近くの森に区かって走り始めました。「カーグ！カーグ！」父は叫びました。「行くな！私たちだけ残さないでくれ！私がさとうきびの皮をむこう。」しかし、少年は森へ走り続けました。彼の母も彼を呼びました。「カーグ！帰っておいで。」彼女は大声をあげました。

カーグは止まって、両親を見ました。しかし、彼には両親の所へ帰る意志はありませんでした。「カーグ！カーグ！」彼は、両親に大声で叫びました。彼らが呼ぶのを馬鹿にしたのです。そして、彼の悲しい両親は、もう息子を見ることはありませんでした。

今日も、あなたは猿たちが、彼らの知っている

ただひとつの名前を叫んでいるのを聞けるでしょう。「カーグ！カーグ！」と彼らが泣いているのを、あなたは聞けるでしょう。